

飯塚伊賀七 生涯を谷田部で過ごし、名主を務めるかたわら、様々なものを発明して、周囲を驚かせた。"からくり伊賀"。

いづつかいがしち
1762 =

常陸国筑波郡新町で、代々名主の飯塚家15代目仁兵衛の子に生まれる。母はヲモヨ。姉はこの年死去。

京都の儒学者山田衡算を初代として代々学問に通じ、広い山林や田畑を有する裕福な飯塚家で、幼少より工夫や発明に興味を示して、数理に明るく育つが、

1769 = 7歳：妹が誕生。

御蔭参流行・1771 = 9歳：祖父治兵衛、続いて12代の後妻が死去。

田沼意次老中1772 = 10歳：この年、干ばつと記録、

大原騒動・1773 = 11歳：この年、飢饉と記録、

黄表紙始・1775 = 13歳：妹が夭折。

1780 = 18歳：

どのように学問を身に付けたかについては現代に伝わっていないが、蘭流の数学者が江戸から出張講義に訪れていたことや、谷田部藩医で蘭学を谷田部に導入した広瀬周伯・周度父子と親交があったことが、数学や蘭学の素養を得るきっかけとなったと推測され、伊賀七自身も和算研究を行っている。

意知刺殺事件1784 = 22歳：この年、飢饉と記録、この間、家督を相続するとともに、年下のヲリセと結婚、

蝦夷初調査・1785 = 23歳：この年、備前国岡山では浮田幸吉が飛行実験を行ない、オランダ経由でヨーロッパの熱気球による初飛行成功のニュースが日本に伝わっていたことに刺激されたとし、*「人力で動く飛行機」をも開発したと伝えられる。親交のあった広瀬周伯・周度の執筆した「三才窺管」から、エレキテルを作ったとも見られる。その他、自転車を試作し、誰も開けることのできない箱や懐中時計まで造ったと言われている。

田沼意次失脚1786 = 24歳：この年、洪水と記録。長男が誕生するも直ぐに夭折したらしい。

寛政改革始・1787 = 25歳：この年、飢饉と記載するなど、社会が不安定な時代に青年期を過ごす。その後の記録もほとんどが災害に関するものであることから、名主として深刻に考えていたと思われる。

1788 = 26歳：すでに「地理学に通じ、谷田部藩からの依頼によって作成した「分間谷田部絵図」を残している。伊賀七の遺品の中で最古の品で、畳2畳分の大きさがあり、現代の地図にも劣らないほどの高精度なものである。

初の横綱・1789 = 27歳：谷田部で熱病が流行した際、他の名主3名と八坂神社に籠って悪疫退散を祈願した結果、収まったという。

すでに、絵図の作成のため、自作の測量器具「十間輪」を用いていたが、さらに「大型のそろばん」を発明し、以後、発明や設計に必要な計算をこのそろばんを使って行なったと考えられる。

松平定信引退1793 = 31歳：娘ヲキヨが誕生するも、

ワタ 正月・1794 = 32歳：夭折。

写楽・1795 = 33歳：娘ヲサノが誕生。

ゾートン来航・1796 = 34歳：「からくり人形「茶くみ女」を製作し、藩主の細川興徳に献上したというが、土佐国の細川頼直が著書「機訓蒙図彙」で「茶運人形」というほぼ同じようなからくり人形を紹介している。

古事記伝・1798 = 36歳：

蝦夷地直轄始1799 = 37歳：娘ヲサノも夭折。

伊能測量始・1800 = 38歳：息子仁治郎が誕生するも、

宣長没・1801 = 39歳：夭折。母も死去。

藤栗毛始・1802 = 40歳：祖母が死去。

また、自宅の斜め向かいにある酒屋へ酒を買いに行くからくり人形「酒買い人形」を作り、自宅来訪者をからくり人形が出迎えたという逸話もある。

ザ 刀報復・1806 = 44歳：飯塚家の所有地を描いたと思われる「分間中野畠絵図」「分間山絵図」、

既存の絵図を拡大したと考えられる「分間下総絵図」の合計5枚の絵図も伝わっている。

この頃から、発明に専念するようになったらしく、名主を隠退していたという説も。

浮世風呂・1809 = 47歳：娘ユキが誕生。のちに婿に迎えた丁卯が17代目を継ぐことになる。

1810 = 48歳：千葉県柏市にある「布施弁財天の多宝造鐘樓堂」を設計し、

高田屋拿捕・1812 = 50歳：父が死去。

この間、飯塚家に唯一現存する建築の代表作「五角堂」を造るなど、優れた建築が多く木製の発明品が多数あることから、若い頃に宮大工などから本格的な建築を学んだと考えられている。また、大型の「和時計」の製作を始め、

伊能測量終・1816 = 54歳：着工するが、珍しい構造で、複雑な建築であったため工事は難航し、

杉田玄白没・1817 = 55歳：この年から常陸地方遊歴した和算家山口款山が旅日記に「五角堂」のことを記録している。

水野忠成老中1818 = 56歳：広瀬周伯が死去。2年がかりで、ようやく完成。

また、ある日、自宅が火事で焼けてしまい、応急処置としてさしこ造で母屋を建て直したが、建物はそのまます孫代々使われ、1950年に伊賀七を慕う人物によって買い取られるまで存在した。

英船浦賀来航1822 = 60歳：おそらく「遷厝を記念して建築した「時計堂」に、完成した「和時計」を納め、朝夕に太鼓や鐘を自動で打って時報したばかりか、自宅の門扉を自動で開閉させる。「和時計」の一部には、お経や神への祈願文がびっしりと書かれ、科学者であると同時に、信心深い一面もあったことが伺える。

この年、洪水と記録、

シゴト 鳥鳴滝塾1824 = 62歳

異国船打払令1825 = 63歳：妻が死去、以後、一層神仏を信仰したようで、

シゴト 事件・1828 = 66歳：柳橋長左衛門が筑波山神社へ常夜灯を寄進するのに協力、

「人力で動く飛行機」をも開発したと伝えられる。天明5年に備前国岡山では浮田幸吉が飛行実験を行ない、オランダ経由でヨーロッパの熱気球による飛行の成功のニュースが日本にも伝わっていたことから、それに刺激されて、飛行実験を行なったものと考えられる。親交のあった広瀬周伯・周度の執筆した「三才窺管」から、エレキテルを作ったとも見られている。その他、自転車を試作し、誰も開けることのできない箱や懐中時計まで造ったと言われている。

富嶽三十六景1831 = 69歳：自宅近くの諏訪神社へ手洗石を寄進。

天保大飢饉始1833 = 71歳：冷夏の上、強烈な暴風雨が関東地方を襲って農作物は全滅、家屋の多くが全半壊の被害を受けた。凶作を見越して、「打穀機」を作り、五角堂内に設置する一方、近傍3村の百姓が年貢の引き下げを要求し逮捕されると、農民と藩の仲立ち。下野国の領主への献上品として、「自動製粉」「精米機」も作ったと見られる。

高島砲術・1834 = 72歳：孫の昌輔が誕生。

滑稽+人情本 1835 = 73歳：財政難となった谷田部藩政改革のために二宮尊徳が招かれ、伊賀七宅に宿泊したという話も伝わる。

1836 = 74歳：天保の大飢饉が続くなか、没した。

几帳面な人であったようで、発明品には製造年月日が明記され、更に取り扱い上の注意点まで添えられているものもあった。からくりになると夜でも突然起き上がりて開発を始めたという。'谷田部に過ぎたるもの3つあり、不動並木に広瀬周度、飯塚伊賀七'と呼ばれ、谷田部の象徴的な存在だった。近年は"つくばのダヴィンチ"という呼び名も登場している。

田村竹男「飯塚伊賀七」(谷田部町文化財保存会冊子とつくば市制25周年記念パンフレットも含む)、